



世界の歴史と塩のはなし



確か2014年のことだったと思いますが、中国で塩の専売制が撤廃されるというニュースがありました。塩の専売制とは、「塩を作ったり売ったりするのは政府だけ」という決まりのことです。その決まりは春秋時代にはすでにあったと言われています。春秋時代とは紀元前770年から紀元前403年頃のことです。塩の専売はその時代以降、形を変えながら約2600年にわたって行われてきました。このことから中国の歴史において、塩がいかに重要なものとみなされてきたかがわかるといえます。そして、このような塩に関わる政策は、中国だけではなく、世界中で行われてきました。

さて、今月紹介するのは『世界を動かした塩の物語』という絵本です。作者はマーク・カーランスキーというアメリカのノンフィクション作家です。塩にまつわる世界史上の様々なできごとがイラストとともにたくさん紹介されていて、楽しく歴史を学ぶことができます。

全ての動物は塩を摂取しなければ生きていくことはできません。しかし、わざわざ塩を作って摂取しているのは動物の中で人間だけです。これはなぜでしょうか？そんな疑問にもこの本は答えてくれます。

この絵本で興味深かったのは、「人間が塩を作り始めたのは文明を持つようになってから」という内容です。なんでも、野生の動物の血や肉には多くの塩分が含まれていて、人間がそれらを狩って食べていた頃には、塩を作る必要は無かったのだそうです。ところが人間が育てた家畜や作物には十分な塩分が含まれていないため、牧畜や農耕が始まると同時に、人間は塩を作らなければ生きていくことができなくなりました。

「生きていくのに必要不可欠な塩をどうやって確保し、みんなに分配するか？」

世界中の人々がこのことを必死に考えるようになりました。ローマ帝国では多くの町が製塩所（塩を作る施設）の近くに作られ、塩を運ぶための道が整備され、塩の値段は国が決定したそうです。また、冒頭にも出てきた中国の、唐の時代（西暦618～907年）には国の収入の半分以上が塩の専売制によるものだったと言われているそうです。国を維持して人びとの生活を成り立たせるために塩はとても大切なものだったことが分かりますね。

また、いま私たちの食卓に当たり前のように塩があるのは、はるか昔から現代にいたるまで、塩を手に入れるための技術が発展し続けてきたからです。塩を手に入れるためにどんな技術が使われてきたのかも、この本でたくさん紹介されています。塩づくりと科学の進歩という視点から、人類の歴史を見てみるのもおもしろいと思います。

作者のマーク・カーランスキー氏は、この絵本の内容をさらに深めた『塩の世界史～歴史を動かした小さな粒～』という本も書かれていますから、興味がある人はぜひ読んでみてください。

最後にクイズです。給料のことを英語で「サラリー (salary)」と言いますが、この言葉の語源は「塩=ソルト (salt)」です。それは一体なぜでしょうか？絵本を読めば答えが分かります。



☆ 今月出てきた本の紹介 ☆



『世界を動かした塩の物語』

マーク・カーランスキー（著）S.D. シンドラー（絵）遠藤育枝（訳）BL出版株式会社 2016年

『塩の世界史～歴史を動かした小さな粒～』（上・下巻）

マーク・カーランスキー（著）山本光伸（訳）中公文庫 2014年